



同志社京田辺会堂光館 (HIKARI-KAN)

ラウンジ展示第19期展

「新島襄と自然科学—同志社のキリスト教主義と科学」

3

$\frac{16}{2} = 8 = 8$ $12 - 8 = 4$
 $8 \cdot 4 = 32$ $12 \cdot 2 = 24$
 $8 \cdot 12 = 96$ $2 \cdot 4 = 8$

今日全止
今日全止
今日全止
今日全止

$\frac{x-4}{3} \cdot \left(\frac{8+12-x}{5} \right) 4 = x$
 $\frac{x-4}{3} = \frac{32+48-4x}{5} = x$

$144 \quad 5x - 20 + 96 - 144 - 12x = 15x$
 $\frac{144}{70}$
 $\frac{240}{-20}$
 $\frac{220}{220}$

27
 -5
 $\frac{22x}{22x}$

$x = \frac{220}{22} = 10$

$10 \cdot 4 = 40$
 $40 \cdot 2 = 80$
 $80 \cdot 2 = 160$

新島襄の「今日」の歴史
 新島襄の「今日」の歴史
 新島襄の「今日」の歴史

〔開催概要〕

同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示第19期展
「新島襄と自然科学—同志社のキリスト教主義と科学」

会期：2024年3月29日～2024年9月下旬

会場：同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ（同志社大学京田辺キャンパス）

主催：同志社大学キリスト教文化センター

協力：同志社大学同志社社史資料センター

表紙資料：算術ノート 江戸時代後期 新島襄旧蔵品

ごあいさつ

ようこそ、光館（HIKARI-KAN）ラウンジ第19期展示へお越しくださいました。光館（HIKARI-KAN）では2015年3月の献堂以来、新島襄や同志社の歴史、また建学の精神に関わる展示を行っております。今回は「新島襄と自然科学－同志社のキリスト教主義と科学－」がテーマです。新島襄はアメリカ・ボストンで神学を学び、帰国後は牧師として教育と伝道に携わりました。しかし新島は脱国以前から、キリスト教や人文学とともに自然科学にも大きな関心を示し、アメリカでも自然科学の学びに積極的に取り組んでいます。今回の展示では新島自身の学びと同志社創設期の教育に関する資料をご覧いただきますが、それを通して、神学、人文学から自然科学に至る総合的な教育を展開してきた同志社の歴史に思いを馳せていただければと思います。

若き日の新島は藩主に仕える仕事を嫌い、勉強のために仕事を怠るほど西洋の学問に強い憧れを抱いていました。特に自然科学への関心が強く、十代半ばでオランダ語を始めた新島は、数年後にはオランダ語で物理学や天文学を学び、さらに数学の知識を身につけるため幕府の軍艦教授所に行き、2年間の猛勉強の末、数学に加え航海学の基礎理論も習得したほどでした。この頃、新島は江戸湾でオランダ軍艦を見て西洋の知性に驚愕するとともに、日本の全面的な革新への大志を抱きます。さらに新島は西洋の学問書等を通じてアメリカの民主政治やキリスト教を知り、その地を訪れたいと願うようになるのです。

脱国してアメリカで勉学を始めた新島は、英語や神学の傍ら、自然科学を多く学んでいます。フィリップス・アカデミーの英語科では数多く備えられていた自然科学系の科目を享受し、アーモスト大学では地質学や鉱物学に喜びを見出し、神学を専門的に学ぶアンドーヴァー神学校でも自然科学の勉強を続けています。彼の得意分野は神学よりはむしろ数学や地質学などの自然科学であったとさえ見られています。その様子は、今回展示されている新島の講義ノートにも読み取れるでしょう。

帰国後に創立した同志社英学校では、人文系、自然科学系科目と神学科目が準備され、新島自身が物理の担当をしたこともありました。また同志社病院と京都看病婦学校の開校後は、自然科学を専門的に教えるハリス理科学校も開校しました。展示には同志社における自然科学の足跡を垣間見るとともに、新島が夢見た、キリスト教に基づく総合大学への道のりをも窺うことができます。良心をもって世に仕えるために必要な知識と人間性の涵養、それを理念として掲げる同志社の教育の営みを感じていただければと願っております。

キリスト教文化センター所長

村上みか

2024年 3月

目次

ごあいさつ	1
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカにおける学び」	3
展示テーマ「同志社における学び」	13
資料リスト・使用写真リスト	23

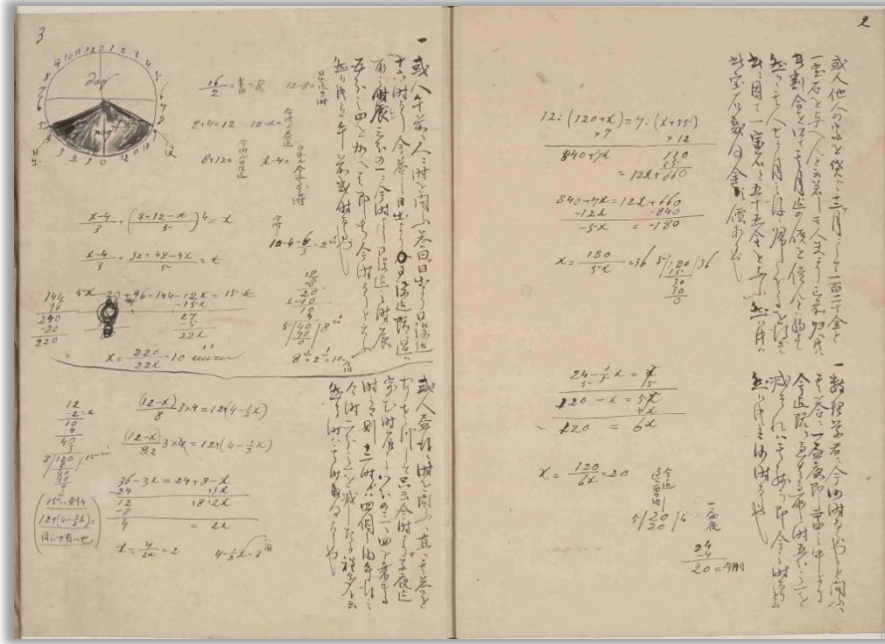
[凡例]

- 一、本パンフレットは、同志社京田辺会堂光館ラウンジを会場として、2024年3月29日から2024年9月下旬まで開催する同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示第19期展「新島襄と自然科学—同志社のキリスト教主義と科学」（主催／同志社大学キリスト教文化センター、協力／同志社大学同志社社史資料センター）の解説付き簡易冊子である。
- 一、展示資料解説においては、冒頭に資料名、年代などの基本情報を可能な限りこの順に記した。なお、複製資料にはその旨を明記し、また、年代については特定可能な範囲で記し、書簡及び日付の記載が重要と認められる資料について適宜月日を記載した。
- 一、ポスターパネル資料写真においては、本文中には写真名のみを記した。
- 一、全ての資料及び写真に関して、現在判明している情報は「資料リスト」及び「使用写真リスト」に記載した。
- 一、年月日表記は、新島襄の慣例に習い、新島が太陽暦を用い始めた1865年（慶応元）1月30日以降については太陽暦を用いる。この日以前は、太陰暦を用いる。
- 一、新島襄の名前の表記については、便宜上、誕生から密出国後アメリカに到着し、フィリップス・アカデミーに入学するまで（1843年2月12日～1865年10月30日）は新島七五三太（ただし、諱を使用しているときは新島敬幹）、それ以降は新島襄とした。英文で書かれた場合でも、表記は日本語で統一した。
- 一、展示資料の解説は、同志社社史資料センターが担当した。
- 一、パンフレットの編集は、キリスト教文化センター及び同志社社史資料センターが担当した。

展示テーマ

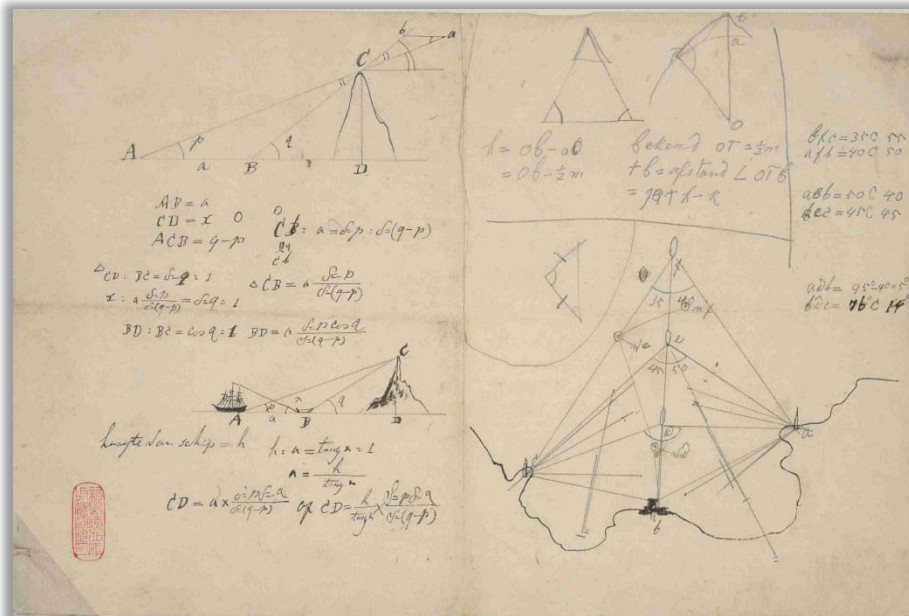
「新島襄の日本とアメリカにおける学び」

新島襄は幼年期から青年期にかけて、武士としての素養から、西洋の学問、キリスト教まで実に多様な学びを経験しました。なかでも、時間を費やした学びが、数学や航海術、測量術といった実学から解剖学、生理学、建築史など広範な範囲に及ぶ自然科学でした。密出国後に新島が在学した米国のアメリカの中・高等教育機関での学びも、自然科学が中心です。ここでは新島の江戸とアメリカにおける自然科学の学びの一部を紹介します。



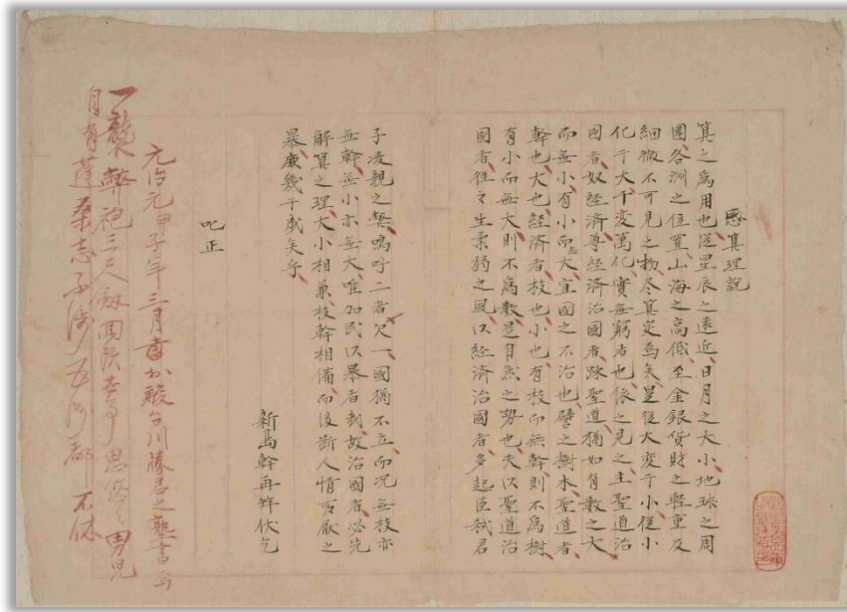
算術ノート (複製) 江戸時代後期 1冊 25.5×18.5cm

新島が、代数学を中心に、設問と解答を書き込んだノートです。設問は文章題が中心で、密出国をする前に江戸で生活していたころに使用されていたと考えられます。



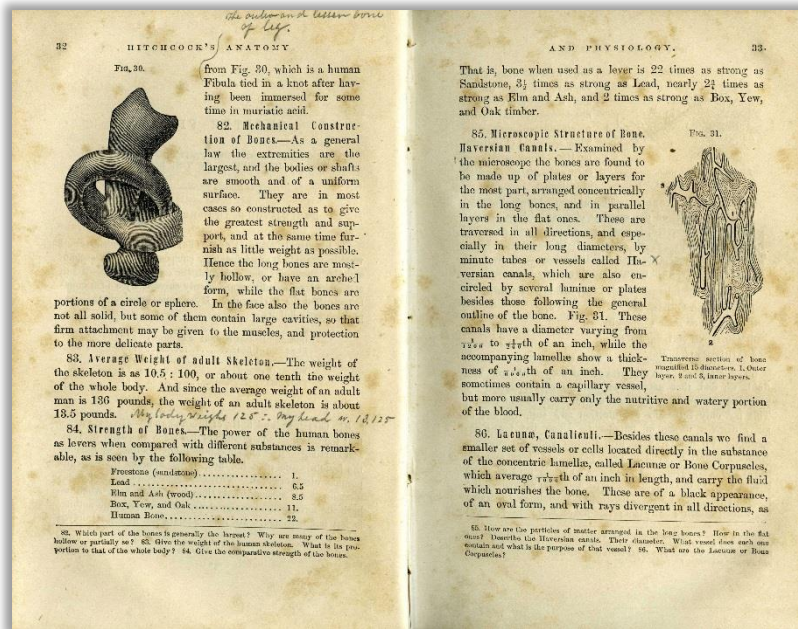
測量術に関する資料 (複製) 江戸時代後期 3枚 27.5×41cm

新島が江戸滞在時に海岸測量の演習のために使用したものと考えられます。主に三角関数で導き出した距離や角度を書き込んだ図です。



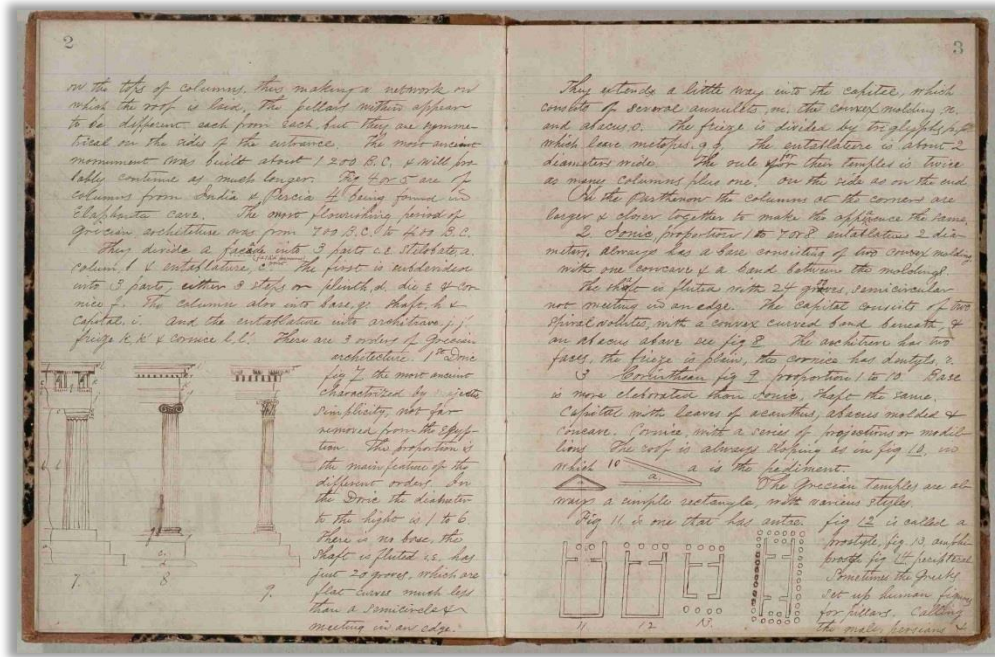
感算理説 (複製) 1864年 (元治元) 1枚 26×37cm

1864年 (元治元) 3月、新島が函館遊学に出発する直前に書いたものです。朱で書かれた漢詩が当時の心境を表しています。



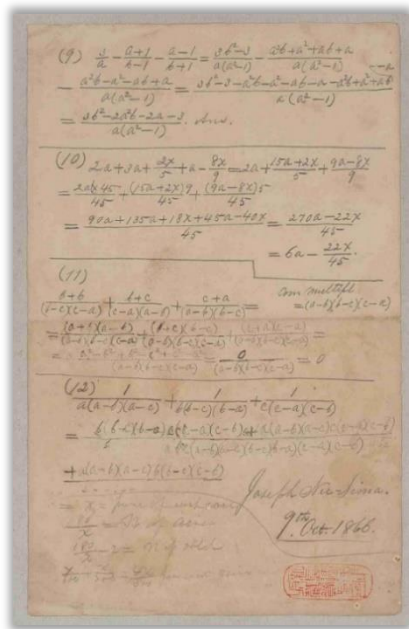
Elementary Anatomy and Physiology (複製) 1860年 1冊 20×12.4cm

新島がアーモスト大学時代に使用していた生理学・解剖学の教科書です。展示しているページは人骨に関する分野です。「83 成人の人骨の平均的な重さ」という項目では、新島が自身の体重125ポンド (約56.7kg) から骨量13.125ポンド (5.95kg) を導き出した書き込みがあります。



建築史ノート (複製) 1860年代後半 1冊 26.5×20cm

新島がアーモスト大学時代にまとめたと考えられるノートです。ところどころに説明に適した挿絵が挿入されています。新島がアメリカで自然科学を広く学んだことを示す資料のひとつです。



数学ノート断片 (複製) 1866年 9枚 23.5×12.4cm

代数学の基礎問題の演習ノートです。1866年10月9日の日付から新島がアメリカのフィリップス・アカデミー在学時に使用したと考えられます。途中式の記入ミスが散見されますが、同じく新島が在米時に自然科学を学んでいたことを示す資料のひとつです。

<江戸での学び>



「万世御江戸絵図」

新島襄は1843年(天保14)江戸城東側にある安中藩邸で生まれました。以来、21歳の時に函館に行くまで、この場所を主に生活の拠点としています。この間、新島は漢学や書、絵、蘭学そして、自然科学も学びました。なかでも、江戸の築地にあった軍艦操練所で、約2年間航海に必要な算術を中心とした自然科学を学びました。

<江戸の外へ>



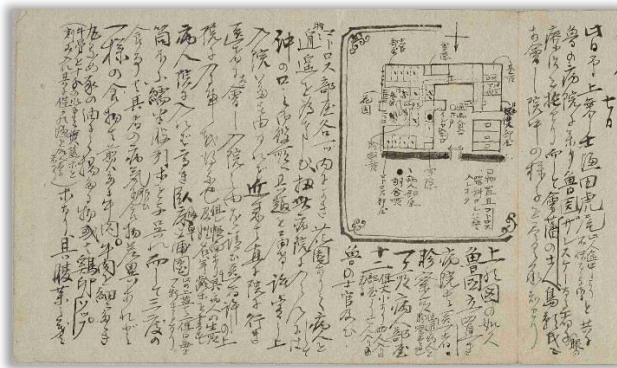
快風丸模型



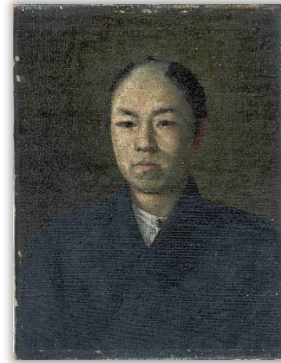
ワイルド・ローヴァー号模型

新島を江戸の外の世界へと導いた船が3隻あります。備中松山藩が所持していた快風丸と、アメリカ船籍のベルリン号とワイルド・ローヴァー号です。快風丸は、江戸と玉島(岡山県)の往復航海を通じて新島に江戸の外の世界を知らしめました。再度、乗船することになったときには、新島を開港地の函館に運びます。一方、ベルリン号とワイルド・ローヴァー号は函館から密出国を敢行した新島をアメリカへと導きました。これらの船は、航海術などを通じて自然科学を学ぶだけでなく、新しい文明との出会いをつなぐ役割を担いました。

<函館での学び>



新島襄「函館紀行」(部分)



原田直次郎作「新島襄肖像画」

21歳を迎えた新島は、安中藩から許可を得て函館に向かいます。当初は武田塾で学ぶ予定でした。理由は外国人と接触し、学ぶことができると考えたからです。しかし、塾長である武田斐三郎が不在であったため、最終的にはロシア正教司祭ニコライのもとに身を寄せ、日本語を教えながら学ぶこととなります。この間に診察を受けたロシア病院が強く印象に残ったようです。医療費無料、最新の設備、充実した患者へのケアを知る一方で、その結果、函館の人心がロシア人に向かい、後年の憂いとなるのではと危惧を抱きました。新島が密出国を敢行するのはこの約1ヵ月後です。

<アメリカで学んだ自然科学>



フィリップス・アカデミー



新島襄 (フィリップス・アカデミー在学時)

アメリカに到着した新島は、彼が乗船してきた船の持ち主であるA.ハーディーに引き取られ、3つの教育機関で学ぶ機会を得ました。なかでも、最初に学んだフィリップス・アカデミー、次の進学先のアーモスト大学での新島の学びは自然科学が中心でした。当時のアメリカの教育機関では特定の学校を除き、古典語（ギリシャ語とラテン語）中心の人文科学と自然科学を学ぶことが通例でした。特にアカデミーでは大学受験用に古典語を修め、大学ではその能力を運用することが重視されました。そのためか、アメリカに来て間もない新島が自然科学に学びの比重を置いたことが想像されます。卒業時の学位はBachelor of Science（通常はBachelor of Arts）です。

<アンドーヴァー神学校時代の新島襄>



アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友、スタッフ



新島襄（アンドーヴァー神学校在学時）

新島はアーモスト大学卒業後、ハーディーとも相談の上、アンドーヴァー神学校で学ぶことを決意し、1870（明治3）年9月に特別コースに入学しました。神学校では、ニュー・イングランド神学を中心に、牧師・宣教師にふさわしい知識と教養を身につけるべく勉学に励みました。また、在学中の1872（明治5）年には岩倉使節団から通訳を委嘱されて文部理事官田中不二麿に随行し、田中とともに欧米8カ国の教育施設や病院、新聞社などを見学しました。西洋の教育を間近で見た新島は、欧米における人間教育の価値とキリスト教感化の重要性を実感し、その後の自身の教育観を形成していきました。

<ラットランド演説>



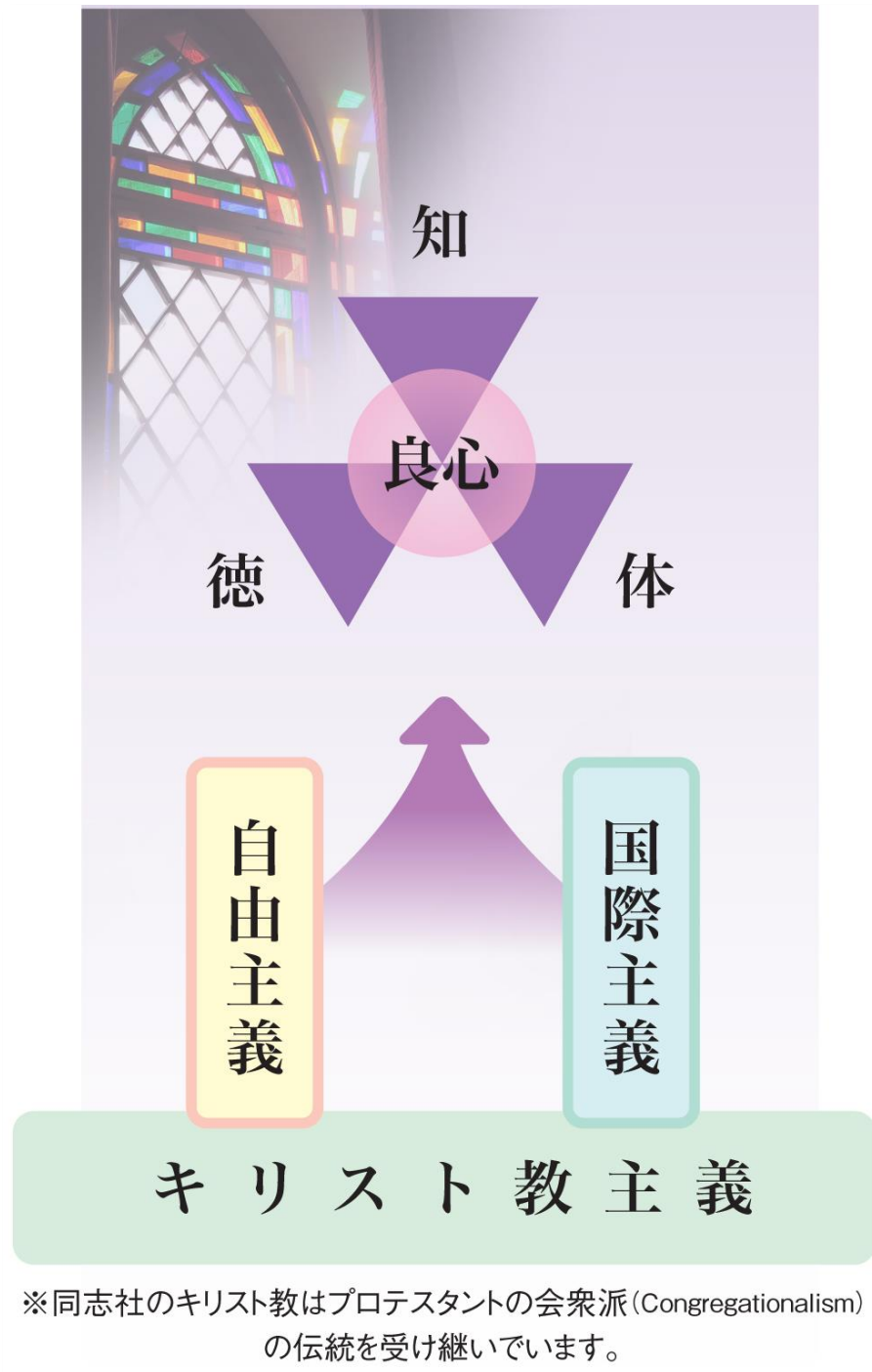
油彩画「ラットランド演説」



グレイス教会

アメリカン・ボードの準宣教師として日本に派遣されることになった新島は、アメリカのヴァーモント州ラットランドのグレイス教会で開催されたボードの第65回年次総会最終日に挨拶のため登壇しました。この時初めて、新島は日本でのキリスト教主義学校設立の志を吐露します。その志に感銘を受けた聴衆から、その場で計約5,000ドルの寄付の約束を得ました。この寄付は、後に同志社の開校・運営に活用されたと言われます。

<同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義>



キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関

同志社の支柱である自由主義と国際主義を基底で支えるものは、キリスト教主義です。これは同志社独自の校風を形成する最大の要素となっています。新島は、学生一人ひとりを、神がつくられた「人格」として最大限に尊重しました。以来、「人ひとりは大切なり」が大事な校風として守られてきました。その結果、聖書にあるように、隣人を尊重し、他者に奉仕する「地の塩、世の光」とも言うべき個性豊かな多くの卒業生を、いろいろな分野へ開拓者として送りこんできました。そうした営みは、これからも永続します。

<チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催) >



京田辺校地 言館 (KOTOBA-KAN) 礼拝堂

チャペル・アワー (キリスト教文化センター主催)

開催期間中、両校地の礼拝堂においてそれぞれ週3回行われており、現代に生きる人間の諸問題をめぐって、本学教職員や教会の牧師、そして様々な分野で活躍されている方々に奨励していただいています。チャペル・アワーは礼拝形式であり、オルガンの奏楽で始まり、讃美歌斉唱、聖書朗読、祈禱、奨励者によるメッセージ、祝福などが行われています。

牧師の方であれば、クリスチャンでない方々にも親しみが持てるように、日々の暮らしにまつわる話などを交えながら、イエス・キリストや聖書のことばをわかりやすく語っていただけます。また教職員の場合には、同志社におけるご自身の学びや体験をお話されることもあります。学生の皆さんだけでなく、地域の方々も参加されていますので、ぜひお気軽にお越しください。

※期間や奨励者等の詳細は、以下のウェブサイトでご確認ください。

<https://www.christian-center.jp/chapelhour/index.html>



<キリスト教文化センター学生スタッフの活動>



クリスマス・リース作り講習会



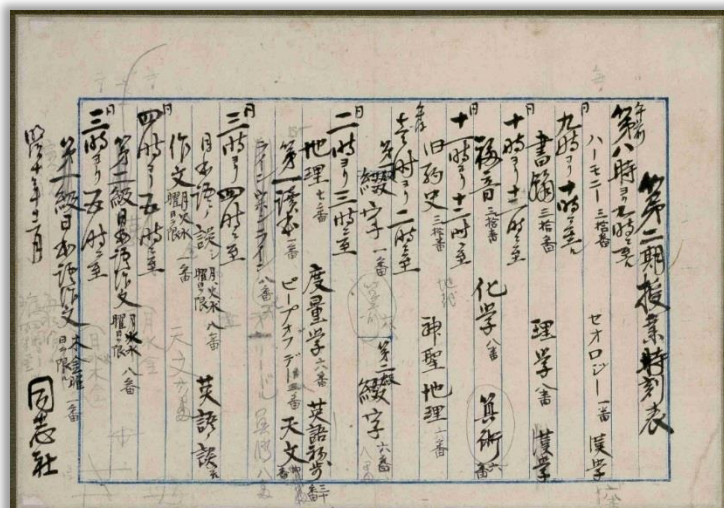
チャペル・アワー司会

キリスト教文化センターの多岐にわたる事業を教職員とともに支える存在として、学生スタッフが活動しています。かつては、チャペル・アワーの司会やクリスマス燭火讃美礼拝での聖劇出演などが活動の中心でしたが、これらに加えて、在学生を対象とした「クリスマス・リース作り講習会」の開催、教会の礼拝への参加、SNS を利用した情報発信、フリーペーパー「YES!!!」の発行など、近年そのフィールドは広がっています。学生スタッフの募集は1年を通じて行っていますので、関心のある方はキリスト教文化センター事務室までお尋ねください。

展示テーマ

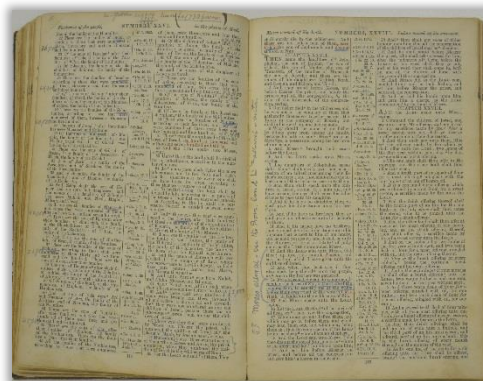
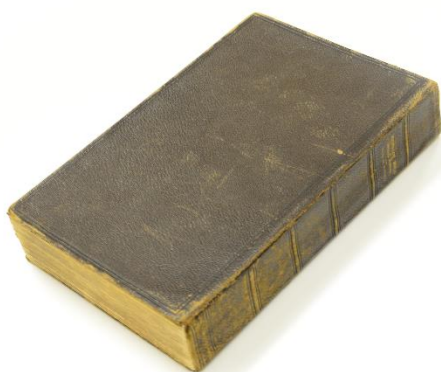
「同志社における学び」

1875年（明治8）に開校した同志社英学校は、その設立当初は人文科学、自然科学、そしてキリスト教に関わる科目が総合的に組み合わせられたカリキュラムで運営されていました。年月が経つにつれ科目は細分化しますが、キリスト教を徳育の基本とする教育の姿勢は堅持されてきました。新島が永眠した1890年（明治23）ごろからは、同志社内に専門教育を実施する学校が設立され始めますが、そのような学校においてもキリスト教を軸とした徳育は決して崩れることはありませんでした。ここでは、創設期の同志社での学びの本質を示す資料の一部を紹介します。



草稿「第二期授業時刻表」及び「授業時間表」(複製) 1877年、1878年 1巻
25.5×37cm

開校3年目2学期(学年は秋始まり)の時間割に関する2つの草稿です。授業時間は午前8時から午後5時までの8時間(昼1時間休憩)で、漢学、算術、理学、綴方など、文理を問わずなるべく幅広く学ぶよう構成されています。また、神学、福音などに加え、キリスト教関連の副読本である『Peep of day』も使用されるなど、キリスト教主義学校としての特色を見出せます。その他、日本語や英語での演説、英作文の授業が実施され、プレゼンテーション能力の育成も重視されていたことがわかります。



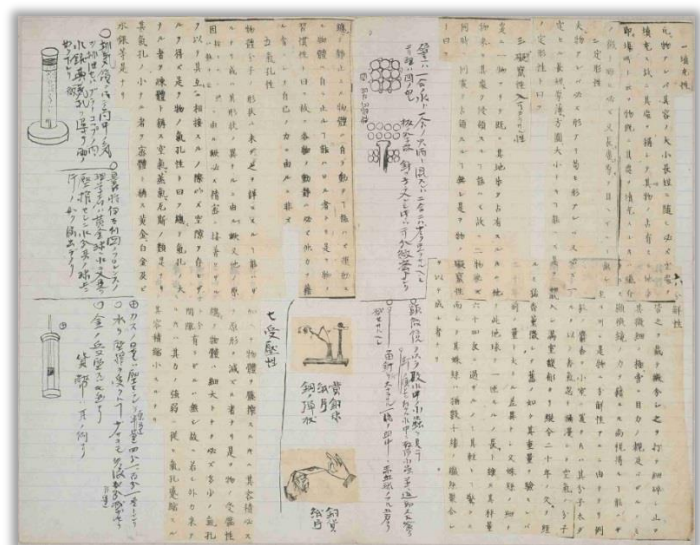
新島襄旧蔵聖書(複製) 年不詳 1冊 21×14cm

新島がアメリカに到着した翌年に、ハーディーが後見人を務めていた J.M. シアーズ (Joshua Montgomery Sears, 1854~1905) より贈られた英訳聖書。これより前に新島は漢訳聖書を手にしていますが、それは一部でした。英文聖書を手にしたことで、初めて全文を目にすることになりました。この聖書の中にある、手書きのメモや印は、新島のキリスト教に対する知的好奇心や信仰の深化過程を示しています。



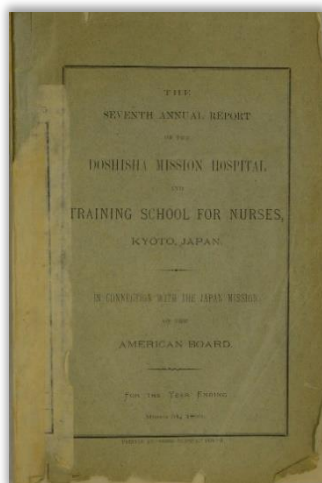
自責の杖 (複製) 明治時代 3片 最大60cm

打掌で折れたとされる新島の杖です。1880年(明治13)4月、当時2年生の上級組と下級組の合併決議を発端とする学内ストライキが発生し、学内が混乱しました。新島は同月13日の朝礼の席で、一連の騒動は学生や幹事の責任ではなく校長である自分の責任である、として自らの掌を杖で打ちつけました。この衝撃的な事件を物語る杖は、新島のキリスト教信仰にかかる贖罪感、そして教育観を伝える象徴として、これまで受け継がれてきました。



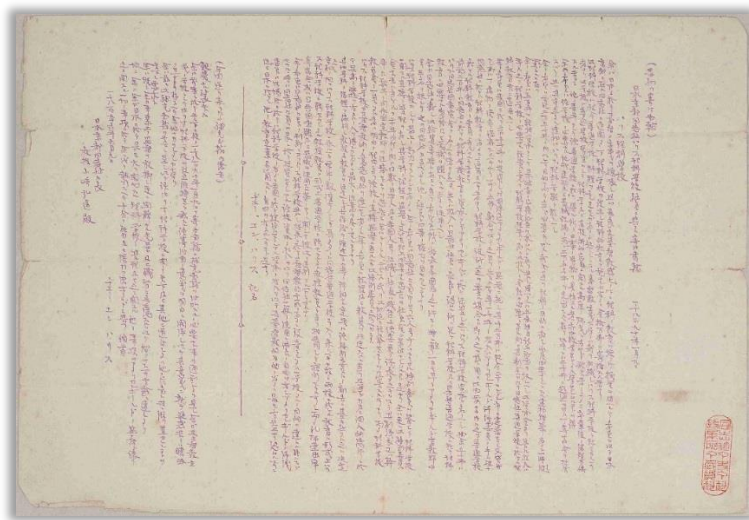
物理学ノート (複製) 明治時代 19丁 32×21cm

新島襄によって作成された、教員の授業用ノートと考えられます。1881年(明治14)に新島は英学校第4学年の物理を担当することになっており、その指導のために作成された可能性があります。新島が物理を担当したのはこの時のみです。内容は宇田川準一訳『物理全志』(原著は G.P.Quackenbos, *Natural Philosophy*) の総論から、物質の性質に関する部分をまとめ、書籍の該当ページを切り貼りし作成されています。



The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses, 1893 (複製) 1893年 1冊 14.5×22.5cm

新島襄により同志社大学設立運動が展開されて以降、同志社では専門教育機関が充実しつつありました。そのさきがけが、1886年(明治19)の同志社病院及び京都看病婦学校の開校です。新島は当初医学校の設立を目指しましたが、資金繰りに苦しみ断念せざるを得ず、それでも病院・看病婦学校を開校します。この年報は、開校から7年後の病院と学校の状況をうかがい知れる資料です。病院と学校の開校以降、自然科学の専門的指導を行うハリス理化学学校、社会科学を中心に扱う政法学校が開校しますが、財政難のため、短期間で相次いで閉校となってしまいます。



同志社社員宛 J. N. ハリス書簡日本語訳 (複製) 年不詳 2枚 28×40.7cm

ハリス理化学学校開校ならびにハリス理化学館建設の多大な貢献者である J. N. ハリスが同志社社員(現在の理事に相当)に宛て寄せた英文書簡の日本語訳です。回覧用に作成されたと考えられます。建物(現・ハリス理化学館)建築費用や公債購入による資産運用、理化学学校専門の寄宿舍建設等、10万ドルの寄付の詳細な運用方法を希望として伝えています。ハリスの実業家としての見識が文脈からうかがわれます。

<開校当初の今出川キャンパス>



今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮



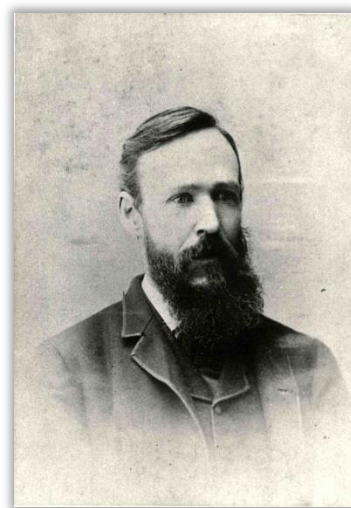
薩摩藩邸跡碑

同志社英学校最初の専用校舎は、木造の教室兼寮2棟と食堂で、在学生の多くは寄宿舍生でした。寺町通（現在の新島旧邸のある場所）の仮校舎から、今出川への移転は、開校翌年の1876（明治9）年9月でした。この土地は、新島襄が1875（明治8）年6月に、山本覚馬の力添えで購入した薩摩藩邸跡です。キリスト教禁教の高札撤去後も、キリスト教に対する反発が残る時代に、内裏（現在の京都御苑）の真北、京都五山第二位の相国寺の門前に校地を構えることになりました。

<デイヴィスとラーネッド>



J.D. デイヴィス



D.W. ラーネッド

J.D. デイヴィスとD.W. ラーネッドは、ともに同志社の発展に生涯の多くを捧げたアメリカン・ボードの宣教師です。デイヴィスは、設立時から同志社の教育と運営の両面に尽力し、ラーネッドも多種多様な講義を受け持ち、日本で最初に経済学の講義を行ったことで知られています。同志社の振興に大きく貢献した二人の名前は、京田辺校地の「デイヴィス記念館」と「ラーネッド記念図書館」に冠されています。

<初期同志社のキリスト教と自然科学>



原田直次郎作「山崎為徳肖像画」



山崎為徳著『天地大原因論』

19世紀中ごろまでは、自然神学がキリスト教と自然科学を強く結び付けていました。自然神学とは聖書のように啓示されたもの以外を通じて、理性的に神の存在を知るという考え方です。よって、法則性が明確な現象、あるいは説明不可能な現象などは神の存在と結びつけて考えられてきました。この関係に一石を投じたのが1859年のダーウィンによる『種の起源』、すなわち進化論の発表です。新島が滞在した1860年代後半から70年代前半は自然神学の影響がまだ残っていました。創立されたばかりの同志社英学校においても進化論と自然神学の関係は論じられていたようです。1878年（明治11）には東京大学と時を同じくしてJohn Thomas Gulickを招いて進化論の講義をしています。また、英学校第1期生山崎為徳が1880年（明治13）に出版した『天地大原因論』は自然神学を論じたものです。

<同志社礼拝堂（チャペル）>



竣工当時の礼拝堂



竣工当時の礼拝堂内部

礼拝堂が完成する半年前の1885年（明治18）12月18日、同志社礼拝堂定礎式が挙行されました。この時新島は「教育ノ基本ハ宗教ニアリ」、「此礼拝堂ハ我同志社ノ基礎トナリ又タ精神トナル者」と述べ、礼拝堂が同志社の象徴的存在であることを示しました。現在も礼拝堂は宗教教育の中心的な場を担っています。

<書籍館 (現同志社有終館) >



大正時代の書籍館



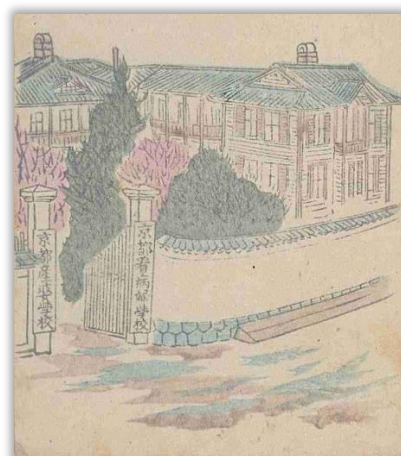
明治時代の書籍館内部

1887年(明治20)に竣工した同志社の初代図書館。内部には書庫と閲覧室に加えて、自然科学の実験室、そして新島の執務室があったと言われます。新島は学校における図書館の重要性について、しばしば演説や手紙の中で触れました。特に同志社大学設立運動時の演説草稿には、参考事例として海外の大学図書館(主に蔵書数)を頻繁に挙げています。新島は豊富な蔵書や施設の充実、学校の高い学問水準の実証と考えていたようです。

<同志社病院・京都看病婦学校>



京都看病婦学校校舎



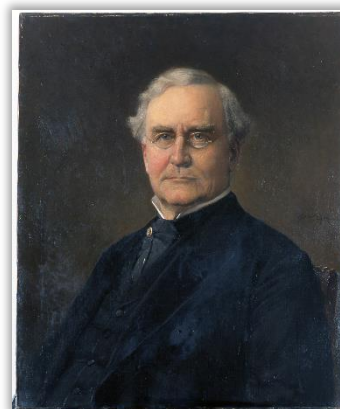
京都看病婦学校版画入封筒(部分)

1886年(明治19)開院・開校。現在のKBS京都がある場所にかつてありました。新島は当初医学校の開設を目指し、協力者であるJ. C. ベリーとともに教派を超え資金集めに奔走していました。しかし、諸事情から開校資金の目処が立たず、最終的には病院の開院と看病婦学校の開校に落ち着きました。これらは同志社で最初の自然科学の専門教育機関となります。しかし、財政的に困窮した同志社理事会は1897年(明治30)以降これらの実質的な管理を医師の佐伯理一郎に委譲します。その後、1906年(明治39)に病院は廃院となりますが、学校は1951年(昭和26)まで存続しました。

<J.N. ハリスとハリス理化学学校>



竣工時のハリス理化学館



ナポレオン・サロニー作「J.N. ハリス肖像画」

J.N. ハリスはアメリカ・コネティカット州セイレム生まれ、同州ニュー・ロンドンにて 20 歳から商業に携わって成功し、ハリス商会を設立します。後には、本業とともに銀行の頭取や製薬会社の社長をも兼務するなど、財界で成功した人物でした。また、教育・宗教関係への多額の寄附者としても知られていました。ハリスは新島の理化学教育に対する熱意に賛同し、同志社へ 10 万ドルを寄付します。その一部がハリス理化学館建設に充てられ、同時にハリス理化学学校が開校しました。ただし、ハリス理化学学校は財政難のため、7 年で閉校になります。同志社における理化学教育の再興は、1944 年（昭和 19）同志社工業専門学校開校のときでした。現在のハリス理化学研究所はハリス理化学学校の伝統の上に立ち、革新的な研究を続け、学生の教育・研究の活性化を促進しています。

<Doshisha Spirit Tour (キリスト教文化センター主催)>

(熊本キャンプ/東京・安中キャンプ、会津・安中キャンプ) >



熊本キャンプ (花岡山：奉教之碑)



安中 (群馬県) キャンプ (新島裏旧宅)



熊本キャンプ (ジェーンズ邸)



安中 (群馬県) キャンプ (現地宿泊講習会)



熊本キャンプ (現地講演会)



安中 (群馬県) キャンプ (安中教会)

Doshisha Spirit Tour (キリスト教文化センター主催)

(熊本キャンプ/東京・安中キャンプ、会津・安中キャンプ)

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった精神と伝統があります。キリスト教文化センターが主催する“Doshisha Spirit Tour”は、事前学習と現地でのフィールドワークを通じて、建学の精神を体感し、同志社を見つめ、自ら省みようとする試みであり、同志社ゆかりの地である「熊本」と群馬県の「安中」を隔年で訪れています（安中の場合、東京や会津など、所縁ある地域をあわせて巡ります）。地元の本学校友会との交流などを通じ、同志社に学び、生きることを実体感することもプログラムに含まれています。

熊本は、のちに日本のキリスト教史において「熊本バンド」と呼ばれ、設立当初の同志社を形作った俊才たちを生み出した土地。安中は言うまでもなく、新島襄の父祖の地（安中藩）です。近年では安中に加えて、新島の妻・八重を育んだ会津、「新島襄先生生誕之地」碑や、同志社第1回卒業生の小崎弘道牧師と青年たちによって創立された霊南坂教会などのある東京を訪れています。

<Doshisha Spirit Week (キリスト教文化センター主催) >



同志社大學應援団による演舞



講演会



キャンパスめぐり隊

同志社大学には、建学以来脈々と受け継がれてきたキリスト教主義教育、新島襄の教育理念、そしてその実践といった建学の精神と伝統があります。Doshisha Spirit Weekは、キリスト教主義教育や創立者新島襄に触れ、同志社人としてのアイデンティティを高めることを目的として2003年から始まり、毎年春学期（5月末～6月初旬ごろ）と秋学期（10月末～11月初旬ごろ）に1週間開催されています。期間中には、学内外からのゲストスピーカーによる講演会、建学の精神や同志社の歴史に関する資料展示、キャンパス内を中心に見学する「キャンパスめぐり隊」や同志社大學應援団による演舞などさまざまな企画を行っています。

資料リスト (全て複製)

資料名	作者・著编者	年代	法量(cm)	員数	所蔵先
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカにおける学び」					
算術ノート	新島襄	江戸時代後期	25.5×18.5	1冊	同志社社史資料センター
測量術に関する資料	新島襄	江戸時代後期	27.5×41	3枚	同志社社史資料センター
感算理説	新島襄	1864年	26×37	1枚	同志社社史資料センター
<i>Elementary Anatomy and Physiology</i>	Edward Hitchcock, Jr	1860年	20×12.4	1冊	同志社社史資料センター
建築史ノート	新島襄	1860年代後半	26.5×20	1冊	同志社社史資料センター
数学ノート断片	新島襄	1866年	23.5×12.4	9枚	同志社社史資料センター
展示テーマ「同志社における学び」					
草稿「第二期授業時刻表」及び「授業時間表」	新島襄	1877年、1878年	25.5×37	1巻	同志社社史資料センター
新島襄旧蔵聖書	不詳	年不詳	21×14	1冊	同志社社史資料センター
自責の杖	不詳	明治時代	長さ60	3片	同志社社史資料センター
物理学ノート	新島襄	明治時代	32×21	19丁	同志社社史資料センター
<i>The Seventh Annual Report of the Doshisha Mission Hospital and Training School for Nurses, 1893</i>	-	1893年	14.5×22.5	1冊	同志社社史資料センター
同志社社員宛J. N. ハリス書簡日本語訳	不詳	年不詳	28×40.7	2枚	同志社社史資料センター

使用写真リスト

ポスター・パネルタイトル	写真・画像	年代	所蔵先
展示テーマ「新島襄の日本とアメリカにおける学び」			
江戸での学び	「万世御江戸絵図」	1854年	同志社社史資料センター
江戸の外へ	快風丸模型	現代	同志社社史資料センター
	ワイルド・ローヴァー号模型	現代	同志社社史資料センター
函館での学び	新島襄「函館紀行」	1864年ごろ	同志社社史資料センター
	新島襄肖像画	1890年か	同志社社史資料センター
アメリカで学んだ自然科学	フィリップス・アカデミー	現代	同志社社史資料センター
	新島襄肖像写真(フィリップス・アカデミー在学時)	1867年	同志社社史資料センター
アンドーヴァー神学校時代の新島襄	アンドーヴァー神学校時代の新島襄、学友、スタッフ	1870年代前半	同志社社史資料センター
	新島襄肖像写真(アンドーヴァー神学校在学時)	1870年代前半	同志社社史資料センター
ラットランド演説	油彩画「ラットランド演説」	1965年	同志社社史資料センター
	グレイス教会	現代	同志社社史資料センター
同志社の精神的な基底をなすキリスト教主義	キリスト教主義と教育理念の関係を表す相関図(キリスト教文化センター発行『基督教主義を以って徳育の基本と為せり-同志社大学とキリスト教主義-』所収)	2017年	キリスト教文化センター
チャペル・アワー	京田辺校地 言館(KOTOBA-KAN)礼拝堂	2023年	キリスト教文化センター
キリスト教文化センター学生スタッフの活動	クリスマス・リース作り講習会	現代	キリスト教文化センター
	チャペル・アワー司会	現代	キリスト教文化センター
展示テーマ「同志社における学び」			
開校当初の今出川キャンパス	今出川校地最初の専用校舎 第一寮と第二寮	明治時代	同志社社史資料センター
	薩摩藩邸跡碑	現代	同志社社史資料センター
デイヴィスとラーネッド	J.D.デイヴィス	明治時代	同志社社史資料センター
	D.W.ラーネッド	明治時代	同志社社史資料センター
初期同志社のキリスト教と自然科学	山崎為徳肖像画	年不詳	同志社社史資料センター
	『天地大原因論』	1880年	同志社大学人文科学研究所
同志社礼拝堂(チャペル)	竣工当時の礼拝堂	明治時代	同志社社史資料センター
	竣工当時の礼拝堂内部	明治時代	同志社社史資料センター
書籍館(現同志社有終館)	大正時代の書籍館	大正時代	同志社社史資料センター
	明治時代の書籍館内部	明治時代	同志社社史資料センター
同志社病院・京都看病婦学校	京都看病婦学校校舎	1893年ごろ	同志社社史資料センター
	京都看病婦学校版画入封筒	不詳	同志社社史資料センター
J.N.ハリスとハリス理化学校	竣工時のハリス理化学館	1890年	同志社社史資料センター
	J.N.ハリス肖像画	不詳	同志社社史資料センター
Doshisha Spirit Tour	熊本キャンブ(花岡山:奉教之碑)	2022年	キリスト教文化センター
	安中(群馬県)キャンブ(新島襄旧宅)	2023年	キリスト教文化センター
	熊本キャンブ(ジェーンズ邸)	2022年	キリスト教文化センター
	安中(群馬県)キャンブ(現地宿泊講習会)	2023年	キリスト教文化センター
	熊本キャンブ(現地講演会)	2022年	キリスト教文化センター
	安中(群馬県)キャンブ(安中教会)	2023年	キリスト教文化センター
Doshisha Spirit Week	同志社大学応援団による演舞	2016年	キリスト教文化センター
	講演会	2016年	キリスト教文化センター
	キャンパスめぐり隊	2016年	キリスト教文化センター



同志社京田辺会堂光館（HIKARI-KAN）ラウンジ展示第19期展

「新島襄と自然科学—同志社のキリスト教主義と科学」

編集：同志社大学同志社社史資料センター

発行：同志社大学キリスト教文化センター

発行日：2024年3月29日

©Doshisha Archives Center and Center for Christian Culture